

「三宝通信」法話

浄土宗 天上山大念寺
住職 大島祥明



供養の仕方は
一人ひとりちがって当然

人は死ぬとこの世から肉体が消えてしまいますが、すべてが消えてしまうものではありません。

死後も「本人」はつづいていくのです。

そして、死んだからといって、本人の性格が変わることはないのです。

生前優しくった人は亡くなくても優しく、頑固だった人は死んでも頑固です。わがままだった人は死んでもわがままのままです。手のかかった人は、亡くなくても手がかかります。面倒見のよかった人は亡くなくても面倒見がよいのです。

さつぱりしていた人は死んでもさつぱりしていますし、くよくよしていた人は死んでもくよくよしています。

一人ひとり考え方も性格も好みもちがいます。

この世に二人と同じ人はいません。私の葬儀で出会った二千余の方も、一人ひとりちがいました。

ですから葬儀にかぎらず、法事にしてもそうですが、供養の仕方というものは、一人ひとりちがって当然です。一人ひとり亡くなり方もちがうし、未練の程度もちがうわけですから、その方にふさわしい供養の仕方というものがあるはずですよ。

それぞれの故人が、いまだどのような思いでいるのか、

どのようなことをしてもらいたいのか、
なにを訴えているのか、

どうしたら安心してもらえるのか、
どうすれば喜んでもらえるのか、

—そのことに心をいたすことがもつとも大切なことです。その心からの行いが、ほんとうの供養になるのです。

●この8月、十万部を突破した大島祥明住職著『死んだらおしまい、ではなかった』より抜粋。同著の問い合わせ窓3333936257(PHP研究所ビジネス出版部)